書評 高田和夫『ロシア帝国論 ―― 19世紀ロシアの国家・民族・歴史』（平凡社、2012年）

池田嘉郎

本書の基本的な視角

ユーラシア大陸に跨るロシア帝国は、諸帝国のうちでもとりわけ複合性が高い国家であった。領域内には数多くのエトノス集団が暮らし、それぞれの地域の歴史および帝国への編入過程も様々である。この複合的な帝国について、周縁の側を研究対象にして考察しようとする試みには、わが国でもすでに多くの蓄積がある。先駆的な仕事としては、山内昌之、中井和夫、高橋清治の著作が想起される[1]。これにひきかえ、大ロシア地域、ロシア人、あるいはロシア・ナショナリズムといった、中心部の事象に焦点をあてて帝国の複合的構造を照らし出そうとする試みは、近年においてもなお稀である[2]。これらの事象には保守主義や右翼思想との結びつきが強いように見えることが、民衆運動に多くの関心を寄せてきたわが国のロシア史研究において、分析対象としての魅力を低下させたのであろう[3]。このような状況にあって、高田和夫はロシア・ナショナリズムをはじめとする中心部の事象の側から帝国の構造を明らかにすることに努めてきた、数少ない研究者の一人である[4]。高田のこうした問題関心は、本書においても存分に生かされている。本書は、ある一つの周縁地域から照らし出すのではなく、中心部の側から全体を捉えた、わが国では数少ないロシア帝国論なのである。

「はじめに」には、高田の基本的な現状認識が示されている。それによれば、ロシア帝国史をロシア人国民国家の歴史と同一視する、帝政期の歴史叙述に典型的に見られるような把握は流石に近年では相対化され、かわりに多民族国家としてのロシア帝国という見方が定着してきた。だが、そこにおいてもなお、ロシア（人）対非ロシア（人）という単純な対立の図式が見られる。しかし「ロシア（人）対非ロシア（人）の単純な二項対比だけでは帝政の歴史過程を

---

[1] 山内昌之『スルタンガリエフの夢 ―― イスラム世界とロシア革命』（東京大学出版会、1986年）、中井和夫『ソヴェト民族政策史 ―― ウクライナ 1917-1945』（御茶の水書房、1988年）、高橋清治『民族の問題とペレストロイカ』（平凡社、1990年）。

[2] ソ連期についてのものであるが、高橋沙奈美の一連の仕事はロシア・ナショナリズム研究として貴重である。たとえば、高橋沙奈美「1960-1970年代の宗教・文化政策とイデオロギー ―― ロシア正教とその文化遺産を中心に」『文化研究と越境 ―― 19世紀ロシアを中心に（21世紀 COE プログラム研究報告集23）』2008年２月。

[3] 根村亮「〔書評〕RUSSIAN RIGHTIST AND THE REVOLUTION OF 1905. By Don C. Rawson」『ロシア史研究』61号、1997年９月、における歯に衣着せぬ指摘を参照。

[4] たとえば、高田和夫「ロシア・ナショナリズム論ノート」『比較社会文化：九州大学大学院比較社会文化研究科紀要』５号、1999年３月。

十分に整理することができない」(15) のである。

この二項対立を克服することが、本書の主要な課題となる。それは、住民集団としてのロシア人—非ロシア人と、地域としてのロシア—非ロシアの両方に関わる。前者については、非ロシア人も数多く中央行政の役職についていたのであるし、結婚による混血も進んだ。後者については、「ロシア帝国の内部にロシア人にとって到底自分のところとは言いがたい外国に相当する地域があったということである。そうした地域の連合体としてロシア帝国をイメージするのである」(29)。

ロシア（人）対非ロシア（人）の二項対比を克服するために、高田は多様な切り口からロシア帝国史を振り返っている。すなわち、「両端（ロシアと非ロシア）を繋ぐ役割と機能を獲得するようになった広範な諸要素（地方・組織・人民・人文学など)」(18) に着目するのである。このような多様な切り口に即して示される豊富な事実は、本書の大きな魅力をなしている。

くわえて、こうした多様な切り口からロシア帝国史を振り返る際に、高田は「科学と文化」の時代という独自の枠組みを重視している。19世紀のロシア帝国では「近代的な科学的思考の導入にともなって生じた社会的認識の進化（深化）がますます複合的な様相を呈して、単線的あるいは一面的に「ロシア」をもってすべてに代えることがますますできなくなった」(16) というのが高田の認識である。

以下、具体的に見てみよう。

領域と境界

ロシアと非ロシアの二項対比を相対化するためには、ロシア帝国における領域や境界のあり方を検討することが有益であろう。この点については、第二章「帝国空間の統治位相」を中心にして充実した議論がなされている。「地理的空間的な想像力は国境を越える」(89) と高田は記している。ハプスブルク帝国の東ガリツィアやカルパチアが「ロシア帝政のもとにあってしかるべきであるが（…）さまざまな経緯によって他国の支配下に置かれている地」とみなされていたこと (89) など、国境線の内と外とが明確に区分されない大陸帝国の特徴が的確に指摘される。英露による東方支配の確執、つまりグレートゲームについて、両国がそれぞれ相手側の書物を短期間のうちに翻訳していたという指摘 (98-100) は、翻訳論・文化交流論として重要である。また、アメリカのフロンティアのイメージがシベリアに投影されていたという議論 (109) も、帝国の自意識におけるパッチワーク性を窺わせて興味深い。

イメージとは別に、地方統治の構造についても論じられている。本国と植民地辺境の関係は一方向的なものではなかったと高田は強調する。「むしろ中央は地方の独自性に応じて相互関係を調整せざるをえない状態に置かれ続けた」。「全体として帝政は直接統治に余力を欠きがちであった。その意味ではそれは「弱い権力」としてあった。すべてにわたる同質性の追求は困難であるだけでなく現実的でなく、異質なものの存在に寛容にならざるをえなかった」(115)。「辺境地帯にすでに存在した個別特有な政治制度や法と」の調整のために総督制が敷かれた

（117）。これらの指摘においては、辺境統治の個別性･多様性に関する松里公孝の議論などが、適切に摂取されている[5]。また、地方の側から見れば「地域（地方）」と「国家（帝国）」の双方に対する「二重の忠誠」があったとの仮説（125）は、より実証的に跡付けていく価値があると言えよう。

ロシア化の多面的な作用に関しては、帝政政府による聖書現地語訳をめぐる叙述（134-140）が興味深い。正教はロシア化の手がかりであったが、アレクサンドル１世は「帝国の多くの民族にそれぞれの言語で聖書を提供することに意味を見出し」た。さらに皇帝肝煎りの聖書協会は、宗派間のいらぬ紛争を回避するため、聖書にはコメンタリーは不要との方針を打ち出した。これらの企図は、教会スラヴ語により書かれた聖典への独占解釈権を侵害するものとして、一部の正教司祭の反発を呼びさえした。

評者の見るところ、これは要するにアレクサンドル１世のルター化である。より広範な住民と接点を増やそうとすればするほど、それぞれの地域における民衆層の言葉（支配層の言葉とは異なる場合が多い）を媒介とする必要が出てくるのである。権力の包摂志向が随伴するエスニックなデモクラチズムとでも呼びうる現象であろう。スターリンの「形式において民族的、内容において社会主義的」もこの延長線上にある。

他に、「ロシア」や「祖国」についての様々な競合するイメージ（157-169）の考察も、ソヴィエト期に応用が効く。第三章「認識されるアジアとスラヴ」において、帝政期の歴史教科書が概観されているのも（190-201）、より体系的な分析のための有用な一歩である。

「科学と文化」の時代

高田が重視する「科学と文化」の時代については、第五章「ナロードナスチと学芸世界」を中心にして、充実した議論がなされている。「ロシア（帝国）はようやく（かろうじて）入手した近代知の手法をどのように活用していかなる自画像を描こうとしたのか」（313）というのが、ここでの基本的な問題関心である。

大きな画期をなすのはクリミア戦争である。その敗戦後、「社会と個人は科学と文化との有機的な連関に置かれるだけでなく、それらによって評価されることになった」（315）という認識は重要である。「クリミア戦争を契機としてロシア社会において科学が社会生活ないしは国家生活に占める割合が飛躍的に高まった」（328）とする魅力的な仮説も提示されている。この状況の下、科学がコスモポリタンであることは難しくなっていく。高田はロシア地理学協会副代表セミョーノフの言葉を引いている。それによれば、科学は「天然資源をいかに人間の統制に置くかというシビアな問題を扱わざるをえない」。「科学者の課題は決してコスモポリタン的ではありえず、国民生活と分けあうものでなくてはならない」（383-384）。ここから高田は、「科

[5] たとえば松里公孝「右岸ウクライナにおけるゼムストヴォ問題　一八六四-一九〇六 ―― ポーランド系貴族、総督、帝国政府」『ロシア史研究』68号、2001年５月。

学およびそれを「生業」とする者の思考における国家化、国民化の傾向は明瞭なのであった」（384）と論じる。この議論の展開は説得的である。

高田はさらに、「科学と文化」の時代がロシア帝国の発展とも相互作用の関係にあったことを明らかにする。「社会集団の動向を数値化して示す統計は徴税・徴兵を始めとして国家運営にとってますます必要不可欠と」なったのだった（345）。この「人民の社会的な相貌の把握」（346）においては、官民の様々な機関・団体が肩を並べた。まず内務省管轄下の県統計委員会が、「単なる行政機関ではなく科学的な研究機関としての役割も果たし」ていた（347）。内務省と国民教育省の傘下で県学術古文書委員会も活動した。軍参謀本部も「地誌的統計的資料」を組織的に収集し、もちろんゼムストヴォ（地方自治体）も統計作成にたずさわった（346-350）。

官民諸組織のこのような提携は、第四章「展示されるロシア・スラヴの民族性」において語られる事象と並行的であろう。そこではクリミア敗戦後のロシア帝国における自然科学の普及活動や博物館設置活動が取り上げられるとともに、これらの活動における官僚制とボランタリーな諸協会の密接な関係が強調される（279-283）。「「協会」の実際的な活動が多くの場合、なかば公的（政府支援的）な性格を帯びた（帯びざるをえなかった）ことなどを考慮に入れる必要がある」。高田はこのように記して、「自発的な協会」の活動をもってロシアに同時代の西欧と類似の「市民社会」や「公共圏」があったと判断するには慎重でなければならないと論じている。評者もこの評価に基本的に同意する。

高田はさらに、クリミア戦後の官民一体となった「科学と文化」の時代の追求が、帝国の周縁部においては予期せぬ展開を呼び起こしたと論じる。「近代（化）は何も中枢にだけ作用したのではない」（18）のである。とくにロシア地理学協会の南西支部（1873年設置）は、ウクライナ人の生活に関する公開講演を行ない、オーストリアに住むウクライナ人とのコンタクトを確立するなどし、ウクライナ運動の拠点とみなされるに至った。その閉鎖は1876年のことである（386-390）。

ウクライナにおけるこのような展開が示していたのは、中央集権とは異なる道が開かれつつあったということである。歴史研究という個別の領域に関して、高田は次のように記している。「一九世紀後半、帝政ロシアにおいて初めて「人民」と「地方」の二大要素が「国家」に対置されることによって、歴史学研究は三本からなる視点を得て、高次の安定性を得る道を開いたのであった」（396）。この認識は、本書における19世紀後半のロシア帝国像全般についても言われていると考えてよいであろう。「科学と文化」の時代という視角によって、高田は19世紀後半のロシア帝国史をすぐれて動的なものとして描き出しているのである。

論点１：「ロシア人」の捉え方について

ここまで見てきたように、本書は興味深い論点や説得力のある構図を数多く含むものである。その一方で、なお議論を深めるべき点も残されている。それはいずれも本書冒頭における「ロシア（人）対非ロシア（人）」の二項対比の克服に関わっている。

まず、本書では「ロシア人」という範疇そのものの相対化は十分ではなく、むしろその本質主義的把握が見られる。それはとくに第一章「編成されるナロード」に当てはまる。「ロシア人」（русские）という用語は帝政期においては輪郭に曖昧な点を多々残しているのであるが、本書の叙述は「ロシア人」という用語が輪郭の明確な特定の集団に対応するという想定に立っているように考えられるのである。たとえば、「クリュチェフスキーの場合（…）独自なウクライナ人やベロルシア人は存在せず、すべてロシア人として扱われた」「非ロシア的現象に独自性を見出そうとしない視野狭窄ぶり」（47）とある。しかし、「ロシア人」をエスニックに狭く限定された集団（いわゆる「大ロシア人」）と捉えるのではなく、今日われわれの言う「ウクライナ人」「ベロルシア人」をも含むものとして捉えることは、帝政期において広く見られたことである。

「ロシア（人・語）」と「大ロシア（人・語）」は重なり合うのか、それとも後者は前者の下位区分なのかという問題も、帝政期には明確な答えを得ることがなかった。この解の揺れやヴァリアントを比較することは、展望のある課題である。たとえばロシア地理学協会南西支部（上述の通り、ウクライナ運動の拠点とされた組織である）が1874年に行なったキエフ市住民の使用言語に関する調査には、「標準ロシア語」と「大ロシア語」とが別々に出てくる。これはエトノスごとの言語の上位に「標準ロシア語」を設定する発想法を示唆するものであり、ロシア帝国の「帝国性」を考える上で興味深い事例のはずである。しかし高田は、両者の「関係は微妙であろう」「実質的な（大）ロシア語派」として、問題を十分に掘り下げてはいない（63-64）[6]。

また、そもそも身分制が社会生活を規定する力をそれなりに維持していた19世紀後半のロシア帝国において、「ロシア人」という範疇にどれほどの社会的・政治的意義があったのかも問われねばならないだろう。この点に関連して、第四章で論じられているロシアとスラヴの関係についても一言だけ触れておきたい。高田は、「アクサーコフはようやくロシア社会はスラヴ（問題）を意識し始めたと総括したのである。それほど、近代ロシアにとって「スラヴ」は遠いところにあった」（308）と記している。だが評者の考えでは、単に「スラヴ」（これをどう定義するかはまた別の問題である）が遠くにあったのではなく、そもそも身分制によって区分されているロシア帝国の公衆の間では、ナショナルな共同体としてのロシアという意識が弱かったのではないだろうか。ツルゲーネフが『その前夜』（1860年）において、ナショナリズムに燃えるブルガリア青年と何事にも煮え切らないロシア貴族を対比したことを想起されたい[7]。それゆえ、「ロシア側はスラヴを相手に自らの立ち位置を確認する機会を得ようとした」（397）という指摘自体は、まったく正鵠を射ていると言える。

なお、身分制との関連では、「異族人」範疇を身分とみなすのは「随分と乱暴な議論」としてスローカムを批判しているが（80）、異族人は身分である[8]。また、異族人範疇を介在させるこ

---

[6] 帝政末期から革命初期にかけての「ロシア人」の幅の広さ、また「共通ロシア理念」（общерусская идея）の探究について、Алексей Миллер. *Империя Романовых и национализм: эссе по методологии исторического исследования*［アレクセイ・ミレル『ロマノフ家の帝国とナショナリズム：歴史研究の方法をめぐるエッセイ』］（M.: Новое литературное обозрение, 2006）. Гл. 6, を参照。

[7] ツルゲーネフ『その前夜』（湯浅芳子訳）（岩波文庫、1951年）。

[8] 和田春樹「近代ロシア社会の法的構造」『基本的人権の研究三』（東京大学社会科学研究所、1968年）、253頁。

とで「ロシア帝国臣民は社会的に大きく二分された」とあるが（68）、この範疇は（身分としてではなく、より一般的に「非ロシア人」として使われる場合でさえも）社会的地位に関する様々な区分の一つに過ぎないのではないか[9]。「差別的な二重構造」（86）よりはモザイクと言った方が、ロシア帝国の法的・社会的構造としては的確であるように思われる。

論点２：「ロシア」の捉え方について

「ロシア人」概念とともに、地域としての「ロシア」の捉え方にも、なお検討の余地があるだろう。「はじめに」で高田は、「近代ロシア帝国の全体像を描こうとすれば、中枢のロシアとその支配を受けるだけの周縁の非ロシアとのふたつから総体が成り立ったのではないことにまず思いを致すべきであろう（…）両者間に存した微妙な力関係の存在が明らかにされなくてはならない。ロシアと非ロシアの関係を繋いだ諸要素が発揮した力学が示されないことには全体は見えないままであろう」（17-18）と記している。ここでは「ロシア」と「非ロシア」を一方的な支配・被支配関係で捉える見方が、克服の対象として示されている。

だが、そもそも「ロシア」と「非ロシア」という対置自体が、帝政期を考える際にどこまで有効なのであろうか。たしかに、民衆層またエリートの心象地理において、ロシア帝国全体の中に、「ロシア」ないし「大ロシア」として括れる地理的･文化的空間があっただろうことは評者は否定しない。しかしながら、第一に、その境界線は、心象地理はもとより行政区分や地理的区分においても、かなりの揺れや、区分法ごとのずれがあったのではないだろうか。第二に、「ロシア（大ロシア）」と「非ロシア」の大まかな対置がなされることがあったとしても、帝国を構成する諸地域の一つとしての「ロシア（大ロシア）」という捉え方も、それと同じくらいの重さをもっていたのではないだろうか。第三に、「ロシア（大ロシア）」と「ロシア帝国」全体とは、区別されることと同じ程度には、一続きのものとして考えられていたのではないだろうか。

このうち第一と第三の点についてのみ記せば、ロシア帝国の版図全体と明確に異なる領域として「ロシア（大ロシア）」が成立するのは、ソヴィエト期になってからである。十月革命で成立したソヴィエト・ロシアは輪郭の曖昧な政体であったが、ブレスト・リトフスク条約や帝国周縁部の離脱、ついで赤軍によるそのソヴィエト化によって、次第に旧帝国全域とは区別された「ロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国」（РСФСР）の領域が浮上してきたのである。それでもなお1920年代には、スターリンの自治化案と共産党内でのそれへの高い支持が示す通り、「ロシア（大ロシア）」と旧帝国版図全体を重ね合わせる発想はかなり堅固に残っていたのだった[10]。ようやく1936年のスターリン憲法制定を機に、РСФСР には諸共和国の中の第一位と

---

[9]「異族人」のいくつかの意味について、Л. Штернберг, “Инородцы. Общий обзор,” А. И. Кастелянский（ред.）. *Формы национального движения в современных государствах: Австро-Венгрия, Россия, Германия*［エリ・シテルンベルグ「異族人。概観」ア・イ・カステリャンスキー編『現代国家における民族運動の諸形態 ―― オーストリア・ハンガリー、ロシア、ドイツ』］（СПб. : Общественная польза, 1910）, pp. 531-532, 参照。

[10] ウクライナなどの「独立」共和国を РСФСР の自治共和国にするというスターリンの自治化案については、

して、はっきりと旧帝国版図（ソ連邦）全体とは異なる個別のアイデンティティが与えられたのである。スターリン憲法制定の少し後に、РСФСР のみの地理的･経済的特性を解説した冊子が複数刊行されたことは、このことを反映している[11]。

以上、本書の問題関心に深く関わる２点について評者の疑問を示した。もとより評者がこれらの疑問を示し得たのは、本書が大きな問いを打ち出しているからに他ならない。ロシア帝国についての議論を深める上での数多くの示唆や知見に満ちている、大部の著作をまとめた高田氏に心よりお礼を言いたい。

池田嘉郎「ロシア共産党第12回大会民族問題部会の考察」ソビエト史研究会編『旧ソ連の民族問題（ソビエト史研究会報告第６集）』（木鐸社、1993年）、参照。

[11] РСФСР［『ロシア･ソヴィエト連邦社会主義共和国』］（М.: ОГИЗ, гос. изд-во полит. лит-ры, 1938）; Ю. Саушкин. РСФСР: экономико-географический очерк［ユ・サウシキン『ロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国：経済・地理概説』］（М.: ОГИЗ, гос. изд-во полит. лит-ры, 1938）. テリー・マーチン『アファーマティヴ・アクションの帝国』（半谷史郎監修）（明石書店、2011年）、497-498頁、も参照。